

東京低地東部における中間砂層の堆積機構

Sedimentary process of Middle Sand under eastern part of the Tokyo Lowland, central Japan

田辺 晋[1]; 石原 与四郎[2]; 宮地 良典[3]; 内山 美恵子[1]; 中西 利典[4]; 木村 克己[1]; 中山 俊雄[5]; 柴田 康行[6]

Susumu Tanabe[1]; Yoshiro Ishihara[2]; Yoshinori MIYACHI[3]; Mieko Uchiyama[1]; Toshimichi Nakanishi[4]; Katsumi Kimura[1]; Toshio Nakayama[5]; Yasuyuki Shibata[6]

[1] 産総研; [2] 福岡大・理; [3] 産総研・地質情報研究部門; [4] 産総研・地質; [5] 都土木技研; [6] 国環研・化学

[1] GSJ/AIST; [2] Fukuoka Univ.; [3] IGG, AIST; [4] GSJ, AIST; [5] Institute of Civil Engineering of T.M.G.; [6] Environ. Chem. Div., Natl Inst Environ Studies

東京低地地下の標高-40 - -20m に分布する“中間砂層”は、貝殻と木片混じりの砂・シルト層から構成され、その下位の淡水・汽水成砂泥互層（七号地層相当）と上位海成粘土層（有楽町層相当）を区分するうえで重要な鍵層とみなせる。従来、同砂層は最終氷期最盛期以降の海水準の上昇が約1万年前に一時的に停滞、もしくは低下したことによって形成された浸食面に累重する、デルタフロント堆積物や河川性堆積物として解釈されてきたが、近年、筆者らによって、同砂層が一連の海水準上昇によって形成されたラビンメント面に累重する潮汐砂州堆積物であるという新たな解釈が示されてきた。しかし、これまでの筆者らの検討は東京都江戸川区小松川地区において2003年に掘削された1本のボーリングコア堆積物の解析結果と同コアの東西5km、南北4kmの範囲の土質柱状図を用いた検討であったため、その広域分布や浸食面の形成過程が成因的に示された訳ではない。

本発表では2004年に東京都葛飾区新宿地区と高砂地区で掘削したボーリングコア堆積物（GS-KNJ-1とGS-KTS-1）と葛飾区水元公園で掘削された東京都土木技術研究所所有のボーリングコア堆積物（MZ）の解析結果、そして埼玉県三郷市、東京都葛飾区と江戸川区全域の土質柱状図をもとに、東京低地東部における中間砂層の分布と成因を検討する。